

## 県北部でりんごの腐らん病の発生が多い

～ 発病部位の早期発見と適切な処置に努めましょう ～

### 1. 現在までの発生状況と今後の発生予想

3月1～2半旬の巡回調査における県北部の発病樹率は10.0%（平成3.3%）、発病地点率は57.1%（平成33.8%）でいずれも高く、県中央部・県南部の発病樹率は0%（平成0.6%）、発病地点率は0%（平成11.9%）でいずれも低かった（表-1）。県北部の発病樹率を年度別に見ると、過去12か年で本年が最も高かった（図-1）。

3月23日に仙台管区气象台から発表された東北地方1か月予報によると、向こう1か月の気温は高いと予報されており、3月22日時点での‘ふじ’の発芽予測日はかづの果樹センター（鹿角市）が4月2日（平成差-7日）、果樹試験場（横手市）が3月26日（平成差-9日）となっている。今後、気温の上昇に伴って病斑の進展が急速に進むとともに、病斑上に形成された黒点状の柄子殻から降雨によって柄胞子が飛散し、剪定痕や雪害による折損部などの傷口から感染することから、4月以降の発生量が多くなると予想される。このため、早期に以下の防除対策を行う必要がある。

### 2. 防除対策

#### 1) 樹体検診の実施

発病部位は樹皮が赤褐色に変色し、表面に黒色の子座を無数に形成するため鮫肌状となる。病斑部の粗皮下は茶褐色に軟腐し、アルコールに似た臭気を放つ。発病部位から上部は発芽せず、枯れ込む。また、枝腐らん（図-2）が集中している樹は付近に伝染源となる胴腐らん（図-3、4）があることが多い。早期に樹体検診を実施し、発病樹の周囲をよく観察し後述の各処置を適切に行う。また、肥培管理の不良や樹勢低下なども発病を助長するため適正な栽培管理を行い、総合的な防除対策を講じる。

#### 2) 胴腐らんの処置

主幹や主枝などの大枝に発生する胴腐らんは、病斑外周の健全部も菌糸に侵されているため、病斑周辺の健全部を含め紡すい状に大きく削り取る。木質部に対して垂直となるように削ると処置部のカルス誘導が早くなる。削り屑は伝染源となるため園内に放置せず直ちに園外へ持ち出し処分する。

処置部は塗布剤のトップジンMペースト、バッチレート又はトップジンMオイルペースト（ただし、トップジンMオイルペーストは成木のみを使用し、剪定の切り口には使用しない）で保護するか、水を加えて団子状にこねた泥で覆い、ビニールなどを巻く。前年に処置した部位は治癒状況を確認し、治癒していない場合は再度処置する。

#### 3) 枝腐らんの処置

枝腐らんは健全部を含めて剪去し園外へ持ち出し焼却する。果柄からの発病部剪去後の切り口には塗布剤（トップジンMペースト又はバッチレート）を塗る。ただし、トップジンMオイルペーストは薬害防止のため、枝腐らん処置部や剪定部には使用しない。

#### 4) 発芽前及び摘果後の薬剤による防除

発芽前にトップジンM水和剤1,000倍、ベンレート水和剤2,000倍、石灰硫黄合剤10倍液のいずれかを散布する。また、発芽は早まると見込まれるため、早期の作業を心がける。

摘果後に果柄の傷からの感染を防止するため、摘果終了後は30日間以内にトップジンM水和剤1,500倍又はベンレート水和剤3,000倍を散布する。

### 3. 資料

表-1 腐らん病の発生状況(3月1~2半旬調査)

	発病樹率(%)			発病地点率(%)								
	2023	平年	概評	胴腐らんの発病樹率(%)			枝腐らんの発病樹率(%)			2023	平年	概評
				2023	平年	概評	2023	平年	概評			
県北部	10.0	3.3	多	1.5	0.5	多	9.5	3.0	多	57.1	33.8	多
県中央・県南部	0	0.6	少	0	0.2	やや少	0	0.4	やや少	0	11.9	少
全县	3.3	1.5	多	0.5	0.3	やや多	3.2	1.3	多	19.0	19.3	並

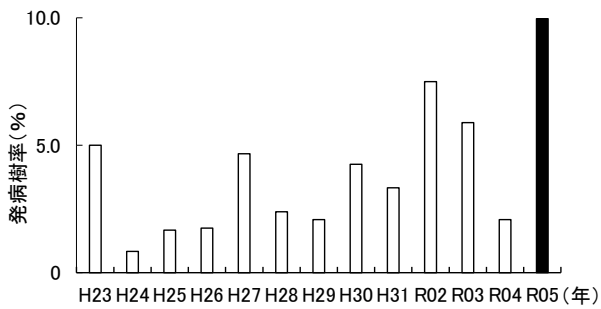


図-1 3月の巡回調査における県北部の年度別発病樹率の推移



図-2 枝腐らんの発病(果柄感染部)



図-3 胴腐らんの発病(初期病徴)



図-4 胴腐らんの発病(末期病徴)

【 問合せ先 】

秋田県病害虫防除所	TEL	018-881-3660
秋田県果樹試験場	TEL	0182-25-4224
かづの果樹センター	TEL	0186-25-3231
掲載HP	<a href="https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/">https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/</a>	